

// 卷 頭 言 (1) //

日本ライトハウス会長
岩橋明子

「視覚障害リハビリテーション」第50巻発刊にあたって

日本で最初といわれた視覚障害者リハビリテーションセンターを設立した頃、前理事長岩橋英行や当時の日本ライトハウス職業・生活訓練センター職員の願いは視覚欠陥学研究の場を作ることでした。もちろん、場所も資金も人材も揃えることは容易なことではありませんし、その手始めに我々の理念、経験、実績、問題などを発表する機関として出発したのがこの本であったと思います。最初は不規則な発刊でしたが、やがて年2回ずつ出されて今に至りました。この間、「三宅文庫」としてずっと資金援助をいただいていた(財)安全交通試験研究センターのご協力に改めて深く感謝申し上げます。「三宅文庫」というのは、前理事長がその頃朝日新聞社の論説委員であった藤田真一氏と共にいろいろな方と座談会のような形で分かりやすく福祉を語って、それを冊子とし更に海外の会議の報告や関係資料・寄稿なども含めて発行していく計画をたて、上記の財団設立者三宅精一氏の名前を冠して資金援助を頂いたのが始まりであったのですが、第2巻を出した後に前理事長が亡くなったため、そこで終わってしまいました。しかし、ご援助は「視覚障害研究(現、視覚障害リハビリテーション)」の発行のために継続してくださるようお願いし、ご承諾頂いたのです。当法人が厚生省委託事業として行なっている社会適応訓練指導者養成コースに参加された方々の研究発表の場となったり、視覚障害に関係するあらゆる分野について専門的な立場から多くの方のご寄稿をいただいたり、本誌の果たしてきた役割は少なからぬものがあったと思います。今日まで私どもと共に育ててくださった皆様にも厚く御礼申し上げます。

視覚障害者のリハビリテーションというテーマがわが国で広く取り上げられてから40年近くなりますが、この間に社会環境にも色々な変化がありました。

視覚障害者を取り巻く状況もニーズも多様化しました。そして、更に福祉の制度そのものが介護保険の導入により大きく変わろうとしています。「視覚障害リハビリテーション」がその折々に対応した内容で関係者への情報源となり、また、ある意味での問題提起者やオピニオン・リーダーとして今後も役立っていくことを願っています。世界の各地で団体やサービス施設が定期的な刊行物を発行していて送られてくるのですが、ほとんどが英語です。「視覚障害リハビリテーション」にも英語版があればどんなにか広く大勢の人達に読んで貰えるのに、そして、恐らく日本の視覚障害関係者の取組みにもっと理解と認識を深めて貰えるのに…と叶わぬ事とは知りつつも願わずにおれません。世界が本当に狭くなった今、日本のことをもっともっと発表してほしいと思いますし、相互理解を通して共に考え共に高め合う時代がきていると思います。長い間我々は福祉の理想として北欧や欧米に目を向けてきました。しかし、今この国でも福祉の制度や将来計画に不安や問題が感じられるようになってきています。日本も同じ舞台で共通の課題を論じ合うことを期待されているのです。

さて遅れましたが、私は今年3月に理事長職を辞し、会長という少し楽な立場にならせていただきました。後任には皆様も良くご存じの木塚泰弘先生がお見えになり、豊かな経験と博識をもって新しい日本ライトハウスを築き上げようとしてくださっております。昨年までは、理事長として時々巻頭言などを書いておりましたが、退任のご挨拶もしないままになっており、この紙上をお借りしてこれまでのご交宜に感謝いたしますと共に、今後とも宜しく願い申し上げます。皆様の一層のご活躍を祈っております。